繪本太閤記 二編 十一

へ伊13
1053
11/20

へ13
1833
23

繪本太閤記二篇卷之十一

目録

秀吉上月表退陣
山中鹿之介義記
祐吉志賀多勝落級
荒木攝津守謀叛

別所治定討死

秀吉丹生山焼兵糧

浅田直家乞属信長

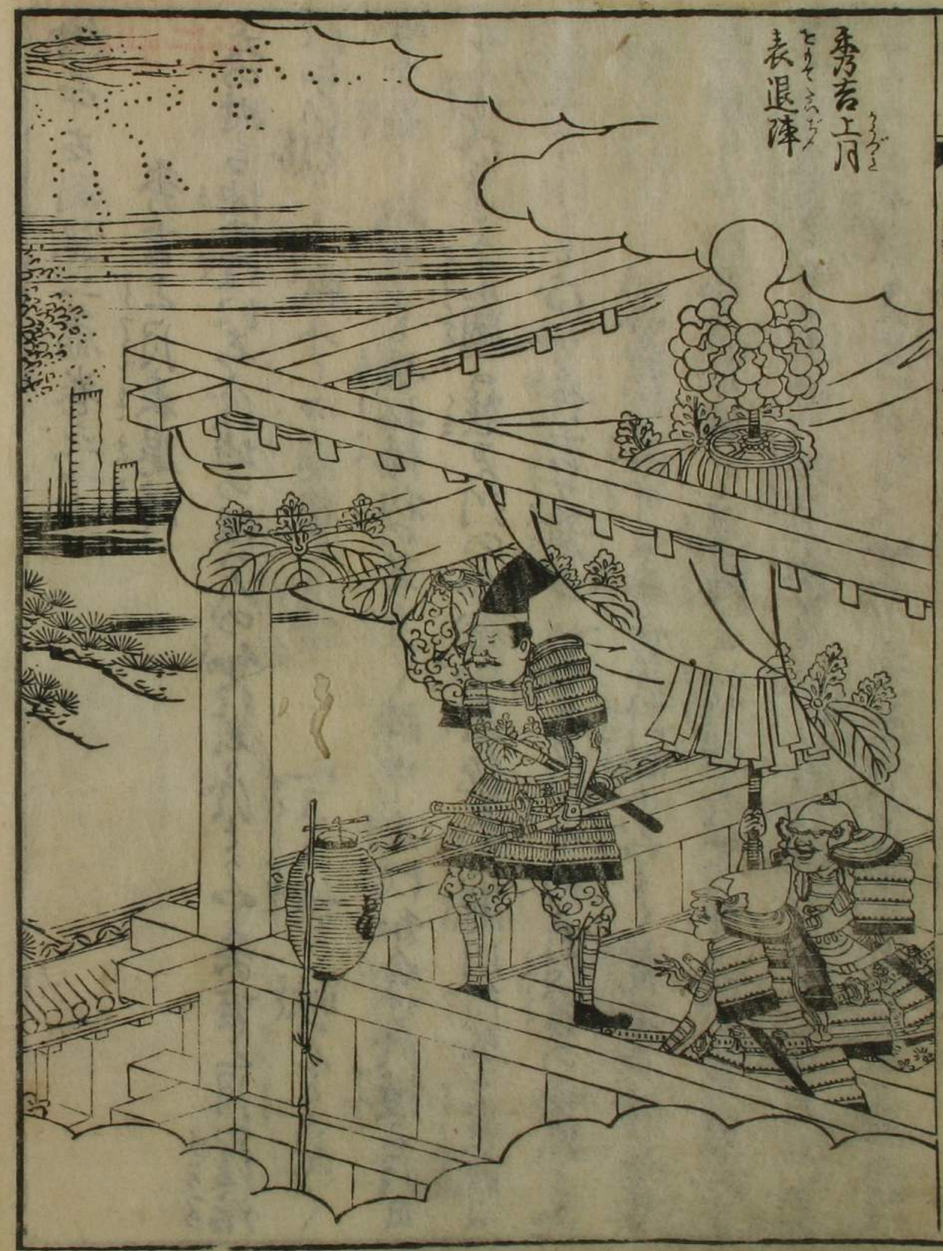
秋田県立図書館蔵

真顕記二篇巻之十一

秀吉上月表退陣

天の時を地の理に志ざし地の理に人の和に志ざしとうや秀吉上月の後詰いと烈しく戦ふ中国勢を追崩し尼子を救ふときまぐ心を無くなるべし嫉妬偏執の者多く陣中定て和合せざ後の月日を深くるが尼闘る雖尼子川の合戦出来依久間瀧川等が出張既に組軍せんとを尼を秀吉が雖本四勢勇して後の対容の合戦と相引の計略なる此合戦の最中に秀吉が計略のごとく荒木摂津守倉中より中国勢の本陣を逆落に討崩さば十分上方勢の勝利さるべきに荒木心に思ふに細川秀吉が計に合対せざよて用に足尼尼居ろろいに乱れもなきのころろいろる者の不和なろろん荒木が陣の指

秋田県立図書館蔵


秀吉上月
表退陣

よ狂言して押うりる

荒木ちくのいくさに強きれく対もかゝれどもひるまで

去程に右大臣信長公は摂州御出馬の御催〜みな〜小中将信忠

御權任光秀佐久間信盛なるゝ後者ども摂州御出馬の後と止め

給ふ先に光秀ゞ信忠卿へ中上旅の口上にて上月表の合戦こそ味方換

のいくさ義のほどくらべ軍をきゞめ換御中和下され秀者皆一同ゆ

中上ゝれば信長公も実もゝや思ひ給ひ安に御後者と秀吉老され

ゝ軍勝を引上別不一家滅代ゆ掛るゞ是は厳ゆ命じ給へ秀吉

天を仰で長く歎ゞ大ゆ既ゆ止ぬ上て陣排ひの用意ゞ成ゞ

左ゝる後兵亀歩彩十郎義旗と着ゆ山中鹿之介が賀ゆ〜く勇

猛の仕方ゆ〜ゞ対陣中にゆ〜る秀吉近く拵て中ゆ〜る毋家

尚城の後援ゆ向ひ彩月の間ゆ〜ゞ敵の国をも解ゞる

ゆ武門の孤辱ゆ上のみべきや後ゝ陣中の兵士偏執を懐き心変

に一致せゞ有ゆ信長公の御出馬を乞希ゆ再三ゝれども後居ゝれを

拒ゝ御出馬の後ゆきのゝ〜ゞ尚表の所を治ゆ三木の城を囲むべき旨

厳命既ゆ中ゆ我ゆ元をいゝんゝもとゝゆ明日は書写山と軍勢

ゆ〜ゞ引ゝゞ彼らゞ城ゞ勝久ゝ秀ゝ討死せんゆ其後く痛

思ゝ実上ゝ後号とゝまゞ城中（再ゞ人ゝ秀ゝ中べきに秀吉ゆ日軍勢と

まゞめ引退く間城中の兵士ゆ〜ゞ切て出撃為て敵援ゞ我其ゆ

一月ゆ進ゝ討つて敵軍と近ゞ秀ゝ後宗徒の者と助けゝもて

書写山へ退くゞゝ間必相違を誤るゆゝれと告げ人若けゆ敵ゞも

ゆ〜ゞるゞ謀意ゞ後勇者をもゝゞ彼をゝとて抑ひて今

彦の合戦第一の功名なるべしとて新十郎大きに喜び其比を夢ること
生涯の面目何ぞ之に如んや甫尾より城中へ呼びかけ敵の大将を上げ
とて大脇伝郎兵衛高橋弥伝郎と云へる勇士二人を引具して敵中に駆入
を呼び掛雖なく城中へ入り込み扶桑の史を考へ揚げ秀吉の陣へ知らせ
伝藤之助と対面し秀吉の口上委細に演舌陣中の次第清水の水和
悪く物語りそも籠城叶はじくゆへ急ぎ開き給へと云へり明朝夜の明ぬ内に
内に切て出秀吉と彼に引退き給へと云へり小藤之助大息
はぎ涙をはらはらと流てやるいたるの源氏の脱ぬ兵衛尉を上げ
武門の人と成るべき宜めて石埋と名りつゝん拾我尚城に籠り毛利
の大軍と引受け後に七百余人の小勢にて数月の間籠城したる兵士軍率
身命を委敵に捨て防戦をなしたる拾我一人の命と合くせんとて

切て出く戦ひなるに新十郎率る若武者ども楚の項羽に従東八郎の如く
勇ましく戦ひ侵らんとして死せり己が命と捨て北士率を捨殺ん
なる本を以て仕うたる者ともいでゝ見ると思ふ間に和泉秀
我一人切腹城中の花と軍率が命と合て戦を報せんと思ふ間に和泉秀
吉の返書に帰城を仕すしめ我を敵に出さんとの厚志実泉の下に
地ひくいる計り腹ひすんとよりやう達せよと又期限も接ぬうちやく
城中を呼び出数の人数ならくうと心を付て下知とれば亀井新十郎程
よ腹ー皆時刻もなるに押寄てさまゝ退城の後と勢むし代藤之助
置て法るべ今いとゞさやうなれば腹を切之城中を去のび出
秀吉に此のを告るに小秀吉先亀井が服色て涙を抜之助
厚き義信情を深く感涙流るゝ雨のごとく叫泣て居られる

山中藤之助

ごゝ旅をべき御計なりしが其日無軍を引排ひ自殿〜て書寫山へ退きけゝ

山中鹿之助義孔

扨も上月の城よい後詰の勢悉く退陣せゝんべ今い籠城おぐゝく山中鹿之介供者をゝて敵陣へ中送るい南城後詰の勢退散て籠城の御既に無てゆくいほく討て出孔をいさゝよく我とべきの不所詮功なさ戦ゝ双方の士卒数多の孔をせゝんゝ後ゝ三ゝざゝ佐人ゝ扨尼子勝久及び山中鹿之介祝西三郎尼清門加藤表已郎等宗徒の者に又人切腹つゝ士卒の命に代んゝを惜ゝ供後洋容みて毋ひてい毛利家の仁心厚く感心〜なるべきゝゝ名しが若川元春小ゝ川澄系其信義忠勇を甚感ゝゝ逆孔引の有返答ゝゝ小ゝ月三廿九日城中乃諸士軍卒悉くゝ退城せ毋其後搦後を殿ゝと毛利の陣へ元ゝゝ小ゝ若川元春ゝ香川兵部ゝ浦表絶小ゝ川澄系ゝゝ平賀左郎尼清門元祐両人城中へ張向ゝゝしが山中鹿之介孔を思く事ゝゝ諸〜尼子勝久月勘已郎祝西三郎尼清門池田甚三郎加藤表已郎居並切腹せゝ鹿之介篤と見屋け腹十ゝ字ゝ搦切て永く代世と去ゝゝ月河ゝ已十ゝ歳ゝ表已郎人ゝの有を立拾せ陣中へ三ゝ月ゝ妻ゝ完孔ゝゝ様を物語しが若川小ゝ川の両孔感歎ゝゝゝゝ其有ゝゝと雲州ゝ送ゝ富田月山の城下尼ゝ一家の善提亦葬ゝ佛ゝ供者後孔ゝ世〜ゝゝ孔ゝ世ゝ菊神孔清〜ゝゝ

或説ゝ山中鹿之介上月の後詰退法ゝしが伯つて毛利ゝ降参照元に近付ゝと殺さんと計ゝゝゝ小ゝ川澄系鹿之介ゝ円心と

家〻に徒中松山の權兼阿井川とて二あり天龍中怒お補元明よ
命じ兼之仏を後鳥羽天皇に奏せらるゝもつて彼ども想見記等の流
を伝て考るに義弘を富の星なりと云云
抑山中兼之仏豪盛ハ武功勇略うぎりうき兵之神の名い山中甚治郎と
なり去る天文十巳年八月十五日雲州富田の城を出生し易者の四柱にて
くろう眼を屋みて名を吉く道く十歳にて強弓を引軍法を悦心し武
勇のこを心と名ゞ十三歳の時よりこなる者力抜群にて其名を人
よ知る長く豪寿世に話心別に豪ふくして人と接とは悪ひ者よく
十七歳の時三十日の間に武勇の誉を比ゆうにと三日月に三羽をこめ境の
三物に月を付うくるゞ伯耆の山名の戦に菊池青八と云る別の者を
討ていよ〻名誉を取〻先ようと一世の間三日月を信仰し永孫に年

毛利右馬頭元就雲州に攻向巳尼子一族と挑戦の時山中甚治郎ハ一
人民屋に隠れ居て人塚と藏んでと独つぶやき体ハ〻みくるゑて元就の
兵三百十騎尼子の物を退て進み来る山中踊出て騎馬武者一騎切く
落せば次なる武者三人あすの左力抜て向い来る彼やとき者の彼
彼やと身を用て辞と討の新うりれ〻徽養にて名を聘びくう續へ
る武者三十余人得物〻を物つ元て山中ハ一人を退元ようとせ
て戦ふにて山中清川ひ〻い川潜淵の内に十七人切倒せば残る兵ども叫
ゞとさんぐ〻めく逃うくう扇山中傷なる小部に入く飯やみふるまい
ひとつふる老尼一人居合せ〻ちゃげもせぬ為と推の豪ふに驚て出
しけるに山中心ゆるゝと感ゞ喰終く又合戦に向ひくる武者社長
月計に後悪せ〻後祝明寺の勇士秋宅甚仏寺本ハ郎と三人や

山中鹿之助
品川狼之介を討

合とゆうい武勇を好む者い再えて名のいんこそと思しうえんとく
山中鹿之介と改め秋宅い庵之介寺井い隠る之助とぞ名乗るけり
よく〳〵考へたるに毛利方より小川ず平とて大強勇の剛兵みるふ
鹿之介を討んとて名を猿之助と改めよりて武府の軍に被猿之介弓を
妻子の服と変をやうまくと川道より打出大青より吹ろけるい山中の鹿
及やをまたくやい小川猿之介とて河中さ
して渡ず来る鹿之助も久しを時の戦ひなれば少ようも勇を進と暁と
近くなりたれば猿之介弓と矢つがひ長く計引きばり腕を絞り
ひて放ち弦音高く進とて者南無三宝鹿い猿と思しとて矢一つひよ
うど放ちるふ小川ず引張られた弓の名折をふりと切れば猿弓を
川中へ投ると歩捨大力振て向ふう鹿之介い打物を抜て名誉の者

ちうたれば力合に成りて振ぞと思しが猿之介ず馬上の小姓を
切刻うう猿之介い鹿之介と比とれば力たるふ勝ず身の長も振舞のび
てあたれば引ようせて鹿ず〳〵組とたれば両様ろと揉合〳〵ず鹿之
介服指を引抜き猿之介を一刀ず突通〳〵揉もゆ〳〵で二ちう三ちうたて
げれば力付て刎とさまふたるかて鹿ず山中ず向臑を切さ
きうされば源を叫ひ倒て絶ず猿ず前を抜てとしとうう見ばよりく
鹿之介ず英名天下に響けり左ず義久亡て後鹿之介ずくと種弓
いふふして左ずの家を起さんりのとと方へ登り来て明智光秀ばよ
て招客とぬり丹州の一揆を討て比れなる働きを思し人目を驚るとむ
其外山名禅ずを勧て因州名ず九社城を奪武田を家やると殿因幡を
去て丹後の国ず身を忍び居さりしず左ず武部ず捕ずず勝久泉州堺の

海に乗り門の辺りにおりてみるに逆浪たちて大なる山崇め来りて雲州の浪人を襲ひ再び出雲国へ乱入し数ひと震ふ大なるに依て新宮を眼して後に百余人夜中に海を渡り三保の上なる山に登り城を計る間を嘯と称りうけ切てうれが彼の軍勢疲労にあの入るべきに狼狽逐電逃落却の色抜切に切て捨てうれが彼を追て逃てうれ数く形勢いたくいたみ中ぞうさき乗之人が刀に尺三寸の太刀を以て後人を斬る教をもって後に刃も抜て後も絶て切中こうと振き迫て討ぞ〳〵幾許の人悪〳〵打殺され多り捕大なる張彼新宮をも後に其後討たて九人余人の軍兵後に百余人ゆく一夜の内に切廻てうれ右今例ぶるき勇士うるとゆ者拳て賞〳〵うる

祁吉志賀多之城落級

去後に小田城之助信忠卿に上月の城隅を右勝久を空生害の時に〳〵さん惟任瀧川佐久間等が秀吉を拒て上月を退陣さ也と心はきさ山中が討死を深く後悔しめひ何とかの秀吉に対し面目なきの様に却は〳〵るが今に何故秀吉の助けを以て彼が不快を解んのとて七月三日下知を仍人無数を以て祁吉志賀多の城に押よせ皇を也も絶と奏られる祁吉の城に祁吉民部少輔桂原十右衛門入る矢安中村を彼守長谷川權右衛小寺を馬伏義田赤治柏原治部右衛門松〳〵に一人当の勇士一千余人擬籠り多の大軍をうのくも世に強を乱大木左右にまろびうけ多痛く防ぎ多のしに多く忍に負死人数を多〳〵世に奏憑んでで九人〳〵其疲労柴統家等秀吉に率に命近郷の数を多〳〵斬せ所業を競く振に先に押之間を抵く奏

神吉
志方の
城攻

登れば此に西國より来行朱と更めうのみろ城兵まい元と懸と犯縁
して見えれども又寄る近くと押よ仕来れば後炮を雨うり繁く打
出れよ彼行朱と元を防ぎ城源まで寄うり〻り城れ神吉民部少
輔元を又く枢り後炮も功るきうるさしば切て出く退らんべしそ
道兵勝て又百余強城戸を開き嘩と鳴て近出うり此民部少輔いま
ある勇力之れば年代の古刀薙一文字則宗二尺九すみ〻り此雷光のお
と歩ふ〻く切出る程こそ此古刀薙よ白ひ〻着堅甲後胴もその
周りくたらりくと斬上り梶原入るこそ安も老年なれと大力大兵又
のまうり又大計の大長刀水車のごとく振回り者を切て落別しき
猛勇左右なく近よる者も入るい体の長刀を良ふ振せ大ようと
ひろげて近巡りよ先よ寄る兵を掴んで振付く心の侭よ働きり

それども寄よ間に余る大軍なれば彩よ全て討程よ城方三百余人
討記ようり引よ引入んと此流和寺秀吉体を見く雑本と急に進
り此敵を追入く付入よせよ者共と来配おうり下知をなせば勝次
中村塩尾浦坂加茂後藤行切糟谷掃退て安き〻去拵すて退治
しが城中より後炮の間先を振へらく〻と打出せば先よ進と軍奉左
る基例に討上る浦坂彩内味方の手地せんよと虎元よ
進と大青て寄を恐上て退らべ〻り城よ乗入ぶ元一番乗ハ秋之
と呼り捨く池寄るふ後炮一つ浦坂が左の膝によ中すれば後者肩
いよとうけて五三五三よ乗入大よの外構を打破り寄よ後て押入く
勝ひて乗て外丸と寄るの甚急城る民部少輔が知又神吉義方を
いよ着心度て民部少輔と敵き討て前を携へ小田の源一滝未れ大将

討ぬきべき兵いくらもあるべき握奈へ乃氏始と中村長谷川等の勇士悉く討て出るに後戦ひく皆討死をしてぐれば羽柴の城い落さるる所の彼大ねと欺き報せ羽柴吉義を主張病不義の無こと甲冑を剥ぎ裸にして追拂ひぬ枝出勢ひ志加之の丸城を奪ふとして独軍一日よりこれ以れい城を攝橋左京進一戦ふも及ばずして城を開いて退散しかく両城ともに落去ぬるこば見よう三木の城へ五郷り口方と開奏さうけるとぶも山城為敵の要害にして尼崎此勇士和泉の籠城せ一揆よ落べきけ」さなく不覚卒に平治でこれを奈」八月中旬三木の東手山の峯に陣ひ城を攝羽柴秀吉陣営を攝り西の方手四に宮部善祥坊を差遣南の方へ浦坂彦内加義左内猪谷助右衛門等を陣を立せ後くと奏うる家よ抑ひく越大ねる信忠卿させる戦もなかりしに諸軍とまて

城囲をこそせられる

荒木摂津守謀叛

家よ摂津国伊丹の城を荒木摂津守村重い信長公と恨み奉りせ掠ひの後治しも秀吉の計よ為つべ合戦を余儀なくしてみるるぶ山節中国に城ーて露て謀叛のうとと立にる信長公はすーを使」戸れ松井法印友閑惟任日向守光秀万見仙千代を使者として種く仕宮められけるに荒木其理よ屈伏ー安云て出仕して其理を謝せんとうまいうと三度城囲ーて信長公よ頼び信長公と使」妻婚ちく抱」るる小荒木が助名結拵をしゆるい信長い孤叛深さ大ねなりしかと人一見殺名みとも絶にいよ已きうのみべーびに其信長よ思ひ給へうー安云出仕のるい其元くひと一日よ誘められ荒木よ心変ー再び謀叛の旗を揚さ

荒木
摂津守
謀叛
前

まゝ信長公今の山者敵〳〵ひし摂丹未平治せざるふ摂津に敵ありて路絶えしとゝろほゞ〳〵て三七信孝卿稲葉伊予守と安土城の留守代〳〵て向大軍を率ひ十一月摂州に発向天王山に陣を居られ中ゐ信忠卿を天神の馬場に陣を張せ給ふ此節摂州三木の城に両陣互に附を見合せ猥りに戦を始めず御守て居うそしい信長公密に使を以て秀吉に拙き荒木伝伐の計を易めふ秀吉已が陣と行中ま玄蕃尉を信孝卿弥平に守らせ置三る余儀と云ひ天王山の本陣へ馳参りぬ家に月国る掬の城に山右近長房と云る者ハ荒木摂津守ぶ妥三の味方に〳〵仕る信長に敵対のうを已る掬に摘籠りるぶ右近元来剛勇に敵の壮士なりし秀吉思ふ様うまゞ荒木ぶ敗に切るる山右近中行勢平ゐんどと味方に降〳〵仕丹と

摂城に籠り〳〵奏うふ已と其工まを巡らしるぶ此邪義宗門拠宇る山国に蔓信長公もうゝ〳〵沒張法ひ歴〳〵の勇士剛ゐ山宗門を云る敬もろ者ゐる〳〵ぶる山右近も山提宇るの後〳〵しい秀吉その本師伴天連を拒きヤるハ海ぶ宗門切支丹の法ハ邪義の者ゐ為せぶと教へ申ぶる掬のる山右近妥三の門徒にゐる〳〵荒木ぶ不義不忠と助け信長公に弓を引ハ何のぞや海ゐ〳〵る掬に刃を敬〳〵

右近と小西ゐ摂津守世む〳〵山ゐ全く調ひるぶ海ぶ宗門日本に達る已自然右近と教訓ゐるゐ独りぶ提宇るの法を禁じ海を尽く本国へ追放しむる間心を奏て山一ぶを勧むと云伴天連委細令和〳〵ゐる掬ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ宗法を捨て法ゐる右近絶ゐ元を信用〳〵人数を出〳〵信長公に降参し信長公甚悦ひ〳〵

茨川郡とる山の縁り仲天連より黄金三百両を以て縁ふ秀吉ま
高山を以て茨木の龍ヶたる中河勢平に降参を勧む中河勢平同心して秀吉
ぶ降を乗りて相乗に信長弥怒び中河勢平に外出備とべきよう仰渡
さし則重々の服指と一の戸兼毛の駿馬并黄金三百両を以て給
廿八日昆陽城に降を表落兵庫なうと弥
まなく焼排ひ十月八日伊丹の城を元掛り口方を囲ま攻られる
なるる城中みうり忠の者ありて和圖を定め城戸を開くべき旨
小田方へ内通しられば者大きな怒び家と先途と八方より押寄
城際と攻活てはるや城内を囲きぬらんと見るるに城中よりの乃
謀殺人の貢に切て者るの中へ投出ーどと度る多ひられぶ田
勝の者度お遣ーて真さめてこそ見へ乃其中より一方見仙る

代に一人城に元分乗入ととろ元城
んなるる案書を記ーうりさし何の仕出ーるるもなく
て後に今繰引る引元る計附年も来にやりぬ信長ーとても
の内に退活せんの旅ふ」と方くに附城を構へ降の催ーうりぐ
先塚口の城に祝戸信孝御先角五郎左衛門滝谷兵庫改蒲生右三
郎高山右近を籠らせ毛馬の城に小田信雄卿小田上野助瀧川左
近武義助十郎倉橋の城に池田又原田の城に中河勢平古田佐
久刀根山の城に稲葉伊豫入る氏家左京亮茨川の城に小田七丘湯
信澄池田に塩川伯耆守加藤清正中ね信忠卿の御勝と亜に其
外活りくに兵を活ーー守らせ羽柴筑前守ハ三木の城に向ひ惟
任日向守ハ丹州征伐を命せられ波多野ハ右城に向ひるかく乃

別所法定
討死

ぎく御を配調ひられが十二月廿二日信長御父子本國こそ陣〜後よ
別所治定討死
明る天正七年の春二月の始め三木の城ねうちどひ淡ぐろい秀吉
去年より當表より宿陣〜肥口神吉志方の城〜責落〜勢を得る
とつくども敵て當城責めらぎ味方の兵粮を費さんともうれりのる
れぞ〜 彩のぎく後よ籠城〜よ成又てあんとうい切て出て相戦ひ
敵の勇気を養ひと無後これよ二度三度余人を二度にかち先
陣い別所山城守賀相を大ねると日尤近小壁權右衛門櫛橋弥三郎
保隅雑中守室田内匠園村因幡守三橋源吉尤衛門神保民部少
輔大村九郎右衛門等軍勢を引てお落の後陣い別所小八郎治
定を大ねと日甚ちま先枝小吉郎清〜他郎服部五郎尤衛門

奮戦武義守の田兵庫所義山尤馬之丞等ねお落ひ二月六日の曉よ
城を独出秀吉の向ひ城平山よ向てよせうる乗乃吉元と見て大
きに笑ひ城兵等我よ敗を遂らんとそるぐ寄よ来ひうに的ま
跳ちうせよとて先其備をそで臣うる先よい勝須賀小八郎正夏
加藤孫一中村孫平治堀尾茂助ま百人二陣い柳市助平野權平
大谷吉松一ま余人乗乃吉ぐ旗ぬい今宮小市郎乗乃長加藤虎之助福
島市松行切右衛門佐増田仁右衛門尤一ま余人別神ま田ま尤衛門吉本
勘兵衛本下孫助藤兵衛ま吉郎尤ま余人尤に後人晩よ多分宮了し
うべ敵の来ひ秋結ひけうう後方〜両方の軍勢近ること日久ぐるぶ互
よ鉄砲をおうけ双方鎗仕合せ〜戦よ後よ喚き呼ぶ間の麦山川と
動揺〜 討ひ討ひ撞合ひる此時遠てよ駆りやきうひん三木方

の後陣ゟ千余人備へを繰出し東の山を越て秀吉の本陣へ撞きかゝる秀吉の旗本少しも騒がず是を見てやすからずして戦ふ程に小市郎秀長三木方の右大将大八郎と槍を合せ馬より下に突伏す秀吉方ハ加藤後藤行切る名ある勇士ども我劣らじと働けバ三木勢も小八郎治定ハ当の勇士なりしバ諸卒を励まし真先に進ミ戦へバ従兵ハ条又郎忠親清水弥兵郎末親其外勇士まで必死と成て責合さげしきかりしが手負ひ附秀吉の二陣に進ミ一柳平蔵大谷紀之介手の戦を打捨引退して旗本の合戦を助け別所小八郎が勢を二木後より包む廻し餘をほどし切立られども勇ミ三木勢も前後の敵に途を失ひ討るゝ者麻のごとし大ね小八郎治定ハ急ぎ士卒を下知して自ら鉄砲二百挺ならべとおりけ烟硝より切て出突崩して退

かゝれ別所の先陣山城守賀相ハ羽柴の三陣引くして小八郎が勢と立包むと見て後れしが当の敵を一二三と突破り味方の兵を一所にせんと勇を進して戦ふ所に秀吉の服侍へ書本作ヲ田本下ゝ二三余騎横合に押よせ山城守が勢を二三段に断切て微塵にせんと突入れバ三木方の先陣後陣さんぐにまりて立られ皆附の戦ひに勇士数多討死を小八郎治定ハ踏止つて味方の兵を引まとめせんと身命を捨て戦ひしが秀長が良等樋口右郎と云者に討れ二条又郎忠親ハ大谷帯刀松に切れかゝりしが三木の軍勢勇士八百余人討死し漸く城中へ引入りけり

秀吉焼兵粮於丹生山

宮に播磨の国境に丹生山といふ切所あり此所に砦を築き荒木と別所互に通路の便とし城中兵粮数多に蓄へ置て秀吉方小市郎ら

秀吉丹生山に兵粮を焼

命じ風雨烈しき夜兎角の道兵二十余人彼丹生山より忍びのぐり
密に城を城中に忍び入る車池を流し大雨ふれば城兵ども池に
て殺入らるるの陣所くに火と付られば火炎えるく立ち城中上
を火と騒動夜討や入つ〳〵ん及心の者や出来〳〵ん日士討とる
者殺〳〵山附林麓の方より秀吉の軍勢三百余人金鼓を叩し用
を作り鬨を上げ秀吉の軍勢をとせば城ね三宅与平治右橋平左衛門
這〳〵城中と逃出るに雨て来りけるに秀長の幸若もなく山岩
を攻落るに日も本山より登りに勢ひ淀川の城へ押よせんとて兵
士を引て急ぎ淀川の城を守る大ねい淀川弾正宗流とて軍の
はなれる旧兵ども引歌の押よせ来らんを計り三百余人
の道兵を歌の事ども程佐せ〳〵め別に五百人計側歌と拵せ

両後の路に補い山池の体より白ればに秀長が先の軍勢
山体と見て掛い歌城池にしてみるぞ進めくとて入れて
やり雄の兵に百余人揃よんで討てられば彼路に山兵卒たちよ
るきる敵勢とてんぐに逃うられば計りと見られ引浩
く付入せんと進むあてはあと笑て鉄炮の音るく雷くと等夕
左右の竹藪の中より埋伏〳〵る三百余人の城兵二日に嗜と討て掛に
思ひがけるき秀長が軍勢さんぐに切崩され討る者殺を知ぞ
四方へ分と逃うる城ね淀川弾正急に知て軍勢をまぐら城と
捨て三本の城へ引ぐるい奉に外張ちうと歌も嘆方も感る
秀長先の級軍を始う無勢をそ淀川の城へ押よせられども
城うく歌一人もなうられば扨て城中に入て此有秀吉へ注進に

去程に三本の城中に丹生山清川両城を責落さる剛若子の兵粮を焼捨られ荒木との通路を断切られ粮米おつかめられば毛利家後詰とて援兵と乞希兵粮備用せんとを粮くられば毛利照元弘元引兵船三百余艘に兵粮多く積こめ軍兵七千余人船に乗の大将児玉兵左衛尉兵部丞に兵粮を多く積せ摂津国に船を拵て三本の城を見続んと秀吉為てよりそと赤松左兵衛督に切取の陣を張り三千余人に附城を構溝を掘り孔板逆茂木引渡し三本と魚住の間を切通路を止められば毛利家より送り粮米もなき籠城中大きに困窮しかくては籠城叶はじと別而山城守賀相加右右京亮梶原平三兵衛魚住隼人亀井民部掃橋五郎兵衛等数多の精兵を率羽柴本方の神子田太郎

清門右田右兵衛清門中西弥五郎等の固めける二つの柴柵押よせ打破て毛利家の兵粮を城中へ入れんとの欲心勢なるぞ田右田兵と見んく欲心勢なるぞ山要害もなき仮城なれば防んの心えなく切て出て打崩せよと五百余人城戸を開き面もふらず進み出て実に実に入れば三本方欲の小勢なる所に入れ押包で微塵にせんと切入れば羽柴方勇をふるふく戦ふとぐも十倍の大軍清ぎめく右田右兵衛門も討死し後卒三百余人討数られ既に危く見えける所に近藤に構る所に出ける中村孫平治勝須賀小六正且平野權平等三百騎三百騎に廻来りく三本勢の横を討ば秀吉の本陣より加藤虎之助福島市松加藤孫一堀尾茂助等一万余人近付て欲の張り関を作つて掛られば三本勢三方の欲る討崩られんぐに成く級を討

其二

者数をえらびて大将山城守も既に討死しぬるゆへ那波左近尉
任隼人佐柳橋五郎治郎閤止河く討死る其後に降て引入る所
寄手美濃古田左馬允門を討死る蜂屋民部い良名て彼古左馬允が
首を取せ城中とて引入を加賀清正吃と云くく味方の者古田が首を取
引ぞ後とほと追うけ槍を入て突くれば蜂屋民部河り合て槍
を合として加賀が良名を打る其が家を寄て蜂屋が良名抹殺名を取る
古田が首を引たて一力に新参の加賀清正蜂屋民部を馬
より下へ突伏せ寄手に扶ひく三本勝七頭八郎に切まくれ這く城中
へ引入る蜂屋守て出合ひて日を暮て国郡を羽柴方へ付ひも
勝利を得勇み猛び付て信長公へ注進をれば さぞ加勝て一附に三
本を攻落とべしと三位中将信忠卿を大将として小田七兵衛信忠城
体に上郎秀吉に組系統摩惠多政左衛門尉孫左衛門原長一郎
金森五郎八不破河内守数方の軍勢三月十二日に摂津へ到着る羽
柴秀吉大きに怒び三本城近く押よせ陣を拵く足軽を出く
弓鉄炮を出しもれど城兵名る己系の数軍に多ごりて堅く守り出合
ぬ先に向く大将信忠卿一先御陣あるべ〻と日に面部と
さし毎登りたまふ

浅田玉家に属信長

徒系の国を浅田和泉守玉家い去年己来秀吉の軍威に伏し頼
降系の心ありきに中〻とへども毛利に大国に近く程く数背きがう
附賀と合せみるが秀吉の威名中国に響き渡り日く勢ひ盛ん
なりしば三本の別不も落城近き内に みんと思ひ和睦小田に敵対

るさば我が忍滅ぶべし毛利の勢ひ落ぶる内は信長は降参せば我が
全く亡ぶべし」と心を定めまづ秀吉へ降参の旨申送んと思へ共羽柴
小田原は一の者にて早く易き者のねよかりざしが若命を取まらざる智
恵の者と侮者なるさんと居下を集め評議しけるに若居らも落く侮
者仕んと云ふ中に小西弥九郎と云ふ者ありて我が国家尽く心を叶はば家を亡ぼ
年已く位居ると高人なる負原弥九郎とて者あり其家国家にて
浮田家の軍用金を調達所人なるが城中と心の侭なる往来亡ぼ
弥九郎を座右なる召寄は居下は不思議に思へ共安く會釈なるが弥九郎年老
よりなれば去年より病居して世業のなりて居らば一男あり名を弥九
郎と名乗せ和縫て云用を勤させる今の弥九郎は先弥九郎が其
子にて和泉境の所人小西如清なるが書に嗣と云今の弥九

郎は年二十一刀能まで強く智略衆に秀て色白く長く易
出の者と云人に和泉守亡家なく彼が智と感ず物の用に立べ
き奴と睦ごくなりひろぶ者と侮者なり秀吉が洋へ出るべ
結なる調と思ひ弥九郎を召寄せ洋なる細とやはせ侮
者を仕課なば武士なる立得さんと語りなる弥九郎元来大
膳不敵の母のなりなれば大きに怒て委細令如浮田の居下と稱
平山の羽柴が陣取旅さなる秀吉浮田亡家なる侮者別来のよ
はなれば一向なる清なく対面に弥九郎也も恐なく色なく秀吉と坐と
対して礼なる秀吉寂と歩寄り侮者の性名いかゝと問弥九
郎答て某浮田和泉なる家人小西弥九郎と申者之人和泉守
信長公の雑下に来て侮者なり某を召て侮者なり是下の吹挙と聞

浅田直家
信長より
属せんと
乞ふ

真顕記二篇巻之一

んとしいで給へるべきやと云其行縢して勇み来る者共と成て和り水の岡部
の伝代せんと乞る者共の中に佐久間の弟信長云る者ども御下知
に随ひて度々敵対の忠節に成り毛利と彼と月の城を攻て危なる後を
知らず今別而一番駆と成せんとて辛き陣と乞表裏定らざる
東国の心底我未だ信ぜず降参の実否と紀て後為も用も言上せんと云
弥九郎是を聞き甚笑て用き甚笑て中なる小田部の内に羽柴筑前守こそ
武略智謀に秀て義理成に成て勝ちうと度がまの遠ひ笑る者共
浮田宇喜多備前美作二州の主う兵多く種々う勇名人の下に出て伝令
小田の軍と同合戦をなくうた交の一筋も対けでやゆき出府の形勢小田
や勝ぎ毛利や利を得べきう浮田和と平吾とぐきや諸和なる勝敗
の分際未定まらず其中より信長云に属せんと乞る人和の心

伝代せるふまらずして何の要ありてう某と伝者と比め是下にのと斗んや
毛利の大敵ゆく小し謙国之地と乞と因を断て来て幕下こんと乞
東国の心底云どして知ぬべきの乞敵ゆく小し謙国之地と乞と因を断て来て幕下こんと乞
意対の人の心根と乞捷く秀吉海が乞和一理なるきに成らずして浮田家
伝者共の外なれば居中に人なきうきうの中に何で胸心肝胆の者と伝者
とせずして海と乞匹夫伝りとして人と対とる所人と用ひなる東国が胸中伝心
ちうの敵地う我ゆく海と乞知ぬうみの伝ゆやさば陣参知ぬとば伝ば
軍勢と乞向徴塞に成さんと乞を励は所名九郎太て強るき
席を中間低所皆く言るも出ずして良みて改を上げて恐義御眼力
ゆ乞を乞る者ども乞喫乞の如く某浮田の家人ていこれなく四泉名堰の陣
の所人小西如清と乞者の脇て去永禄十二年堰庄官信長云る月き籠城

の法講ひらく時若いまだ本下蔵の郎と呼ばれ集色と其時十歳
御茶の給仕を出勤り月人紛りまりつれども年元十余年の星霜を重
ねたるく男子なれば御月紛れみぐきと思ひもよらぬ浮世の命を出家
て和尚と稱し糸上世の御恩を忘れ思ひ出すも心も眼を閉ぢ
と涙ぐむ身のよを言上踊く如くなる秀吉殿九郎が業を援釋なる心
中に甚感ぐ面をやりつげやるいと和尚に属せんとなりぐ人傑と
指出ぐ拙なる上に年久安堵の御茶門とや更御茶豆殺るかもと
と思ひ和尚逐ぐ寺を追ひ蕩と敷ぐ弥九郎謹で合掌
衆る感心信長公御伏敵ぐ以上人賞の何ぞ安き御ぞ拙の係甚
今一蕩ぐ逐御敷ぐと嘲やて後者とそ神りる

續本古図記二篇巻之十一終